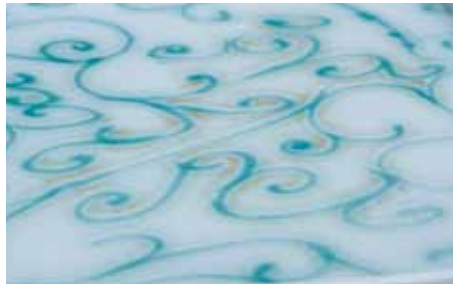




「青白磁鉢」1万2000円。



土をひっぱることで生まれる流れるようなライン。まるで踊っているかのよう。



手前の2点が、粘土をまるくのぼしスライスしたもの。ドライヤーで土の表面を乾かしながら、土をのぼしていく。



たたらの要領で粘土をまるくのぼして、ワイヤーでスライスしてできるうねりのあるお皿。  
「白磁皿」5000円。



水のような透き通った世界観が広がる「唐草角鉢」2万円。



「菓子盛鉢」各1万2000円。

土がもつテクスチャーを生かした、動きのある独創的な世界。

陶芸家 長谷川潤子さん

土のテクスチャーを生かし、大胆につくり出す長谷川潤子さん。例えば、波をうったようなうねりのあるお皿。一枚一枚削り出しているのかと思いきや、まるくのぼした土をワイヤーでスライスすると不思議なことにもうねりのある皿が2枚できあがっていた。長皿は、長方形に成形すると、端をひっぱり揺らして伸ばすことで、みるみる長皿に。

「伸ばすことで、自分が触った感じ、手垢を残さないようにしています。土を伸ばしたり動かすことで、土が本来もっている自然の力を出すことができれば」と長谷川さん。

土をフランスパンのように表面はかたく中はやわらかくすることで、動かした時のテクスチャーがおもしろくなるという。これは、磁土だからこそできることなのだとか。

透き通る氷のような白い肌に、流れるような唐草模様。まるで、水の上に落とされた絵の具に息を吹きかけたかのような、自由でなめらかな曲線。

「これは、泥土や釉薬によってよりあげの線を描く、いっちゃんという技法なんです。いっちゃん描いた後に押し、盛り上げた部分をフラットにするんです。すると釉薬が沈み込みます。そのあと、土を動かすと勢いのある線が生まれるんです。職人さんが描くような唐草が描けないので、どうやったらできるかを考えて辿り着いたのが、いっちゃん象嵌ともいえる独自の技法。長谷川さんと土のタッグで生まれる作品は、とても感覚的で自由でおらかだ。

●プロフィール  
長谷川潤子 1964年神奈川県小田原市生まれ。  
1986年女子美術短期大学造形科卒業。

個展スケジュール  
●松坂屋名古屋店  
南館6階アートスペース  
「涼のあるくらし展」  
5月30日(水)～6月5日(火)